

競技の結果は數等の賞狀及び之に添へたる各種の賞を與へ優等者に脩學上の便益を得せしめ之を獎勵するの法を取るべし

七 美術の修養に必要な學科の隨意講筵を設くべし 其學科は美術解剖 遠近法 美術史 考古學 外國語の五科とす 但し外國語は佛語と定むべし

美術の修養に必要ならざる多くの學科を設くるは生徒の課業を多端ならしめ其精神を過勞し爲めに必要の學科に對する力を減殺して實技の練習を妨ぐるのみならず一方には無用の經費を増加すべし 且既に學年を分つの制を廢する以上は實技進歩の程度に應じて必要なべき學科を適宜に學ぶを得る爲に隨意講筵を開き各科の生徒をして随時に聽講せしめざるべからず

外國語を佛語と定めたるは佛國は世界美術の中心となり諸般の藝術の發達したること彼國に勝る所なきを以て其國語を知るは技藝家に取りて利益多かるべく且つ美術研究に留學生を派遣する場合にも亦佛國ならざるべからざるを以て豫め其語に熟せしむるの必要あるべし

(四月十五日付)

八 實技の教授法は主任教員に委任すべし

繪畫及塑造の技藝科を數箇の教場に分ち主任教員を定めて授業を擔任せしむるとせば各教場に於ける教授法は第一項に述べたる方針に背かざる限り之を主任教員に委任し其責を負はしむべし

美術の諸科は各科に於て之を學ぶの順序を殊にし、流派の如何と

教員其人の意見に應じて自ら同一の方法を取る能はざるあり 故に各科に通ずる一定の教授法を設けて規矩することなく 各教場の主任教員に委任するを以て得策とす

九 参考室を設けて内外古今の作品其他美術に關係ある學術の参考品を蒐集陳列すべし

我邦にありて美術の發達上最も闕けたる要件は参考品の備らざるにあり 今日如何なる天稟の偉才を生ずるとも古來の作品を見て解悟するの道なくしては自然其思想狹隘にして充分の技倆を暢ぶる能はず 美術に要する學科を講習するにも單に聽講のみに止めて標本其他の参考品に就き實驗せしめざれば完全の學識を得ること難し 歐洲諸國にありては博物館の設備整ひて美術家の参考に資すべき古今の作品を完全に蒐集したるに係らず各美術學校には別に陳列室を設けて教育上必要の参考品を集めたり 我邦にありては未だ美術博物館の設備あらざるを以て美術學校内に参考室を整備するの必要は一層切なるを認む 是實に刻下急要なる問題の一なりとす

(四月十七日付)

④ 日本画教育改良問題

明治三十二年三月三日付『読売新聞』に、次のような注目すべき記事が載っている。

●東京美術學校の畫談

東京美術學校にて西洋畫と日本畫との折合面倒なるよしハ豫て噂ありしが先頃外山正一氏同校に臨みて一席の畫談あり夫に付て校長ハ繪畫部の教授に向つて意見書を徵收しつゝありと云ふ 元來西洋畫ハ教授法具りて初學のものをも容易に導き得れ共日本畫ハ氣韻風韵杯に重きを置き雅俗の二つを研究するに止どまれバ教授法に至つて遂に西洋畫に及ばざる所あり されバ外山入道の畫談となり校長の意見書徵收ともなりたる次第にて要ハ日本畫家を以て稍や秩序ある教授法を描劃せしむるにあるよし

〔この記事は他の新聞および同年同月二十日発行『太陽』や同年同月二十五日発行『繪畫叢誌』第百四十六号等にも転載されている。——編者註〕

これによると外山正一は來校して日本画改良法の提案を行い、その提案に関して久保田校長は繪画科の教授に意見書を出させた模様である。外山の提案は前出黒田清輝の「美術教育の方針」に沿う内容のものであったにちがいない。日本美術院の機関誌『日本美術』第六号（明治三十二年三月二十五日）の「東京美術學校にては日本畫を秩序的に教授せむことを講究中なりと傳ふ。」という記事もこうした動向について述べたものと考えられる。このような報道がなされるや、日本画改良問題はたちまちジャーナリズムの好材料となつた。左記は新聞記事のなかで比較的詳しく論じたものである。もつとも『時事新報』の△△生などは前述のように寺山星川と本校改革の当事者の一人である大村西崖の共有のペンネームであつたから、実情に詳しいのは当然であつた。

○美術通信 △△生（この分大村西崖執筆）

△この頃傳ふるものあり、曰く、外山正一、上田萬年、黒田清輝三氏と、久保田美術學校長心得及び川端玉章、荒木寛畝三氏と相會して美術學校日本畫教授方法の改良を謀りぬ、要は日本畫を學ぶ者をして初めまづ洋式の木炭畫を修めしむとなり、我等は意へらく、洋式の木炭畫は固より正しく物象を寫す上に於いて得るところ多かるべし、然れども應物象形の法は獨り洋畫の専有する所にあらず、日本畫といえども着眼を正しくして寫實を切にせば、その結果將た異ならむやうもなし、木炭畫の修業は油畫の技を益するほど、日本畫を制するものにあらず、畫材の具缺より見て東西折衷を企てむには、むしろ全然油繪化するに如かじ、故如何にといふに陰陽光采の精は到底日本畫の能く成すところに非ざればなり、されど寫實の上より見ば、油畫の自然に及ばざると日本畫の自然に遠きとは、其差たゞ五十歩百歩のみ、こゝに於て日本畫は別に日本畫として藝術上存立するの權利あり、その材料手法の既に異なるよりして、其修養上寫生の方法もまた相同じきこと能はず、ざるを手法を異にする洋畫の寫法を移して、直に日本畫に用ひしめむと強ふ、何ぞその見解の皮相に局するや、唯美術としての本性に至りては東西その軌を同じうす、こゝを以て假令其相を異にする洋畫の法式といへども、其性は取りて日本畫に用ひて毫も矛盾することなし、日本畫教育の方法これまで備はらざりしは藝術教育の理論未だ東洋に昧かりしが爲めのみ、日本畫としての修業法の到頭立つべからざるが故にあらず、今にして日本畫の教授法を講ずるもの、東西畫相の不同を顧慮せずして徒にその法

式の移用を企つ、是れをこれ烏澁の沙汰とや云ふべき、何故に洋畫教育法の精神をば取り來りて、日本の畫相に契合すべきやう消化し去ることを工夫せざるや、東西畫の別立は畢竟畫相上の差別に過ぎず、然るに彼の異なる畫相を成すべき手法の修業を以て、直にこれを我に用ひむには我が畫相を成すべき手法、將た如何にしてか之を得べき、洋畫家は日本畫の手法を知らず、日本畫家は洋畫教育の精神を解せず、假令或は和解すともこれを他の一方に消化して用ふるの道を覺らず、學者事務家に至つては、東西の畫に於いて共に其見るところ太だ高からず、爰を以て漫に日本畫の改善を謀らむと擬す、我等は其徒勞に屬せむことを虞るゝなり〔下略〕

(明治三十二年二月二十二日『時事新報』)

○美術通信 △△生〔この分寺山星川執筆〕

日本畫改良法について

日本畫の改良は刻下焦眉の急なり、今のまゝにては東西接觸の結果、到底時代の嗜好に適ふべからず、さりとて美術院一派のすなる枝葉的外皮的改良法にては、これ却りて退歩と目すべきのみ、絲厘の價値なし、嗚呼如何にして日本畫の光輝を宇内に顯揚するを得べき、もし斯道に熱心なる人、意見を抱持せらるゝあらば、文の長短に關せず寄稿せられたし、通信記者の見るところ亦日ならずして紙上に掲載せむ。相共にこの美術界最大の急務を談論する、また快ならずや、〔下略〕

(明治三十二年三月二十二日『時事新報』)

○美術通信 △△生〔この分大村西崖執筆〕

諸家の日本畫改良談片

△通信記者曰く、日本畫改良は、藝術界目下の大問題なり、東京美術學校にては、さきにこの事について多少の波瀾を揚げしといひ、論客小山正太郎氏も、遠からずその所見を發表すべしと傳ふ、左に記するは、記者が往來談笑の間に聞き得たるものなり、固より秩序を追ふて説を盡したるにあらざ、故に談片と名く

△美術學校長心得久保田鼎氏曰く、日本畫は今日既に進歩の極點に達したものとおもはれるが西東、交通の結果、今後は更に或る變動を來さなければならぬ、その變動は西洋畫を日本畫に混化融合することであるといふのは見易いことで、所謂自然の理だ、けれども西洋畫と日本畫とは早いところ〔西洋畫はの欠落カ〕が、合理の寫生を力め、遠近陰影に重きを置き、逼真を至極の境としてゐるが、日本畫はこれに反して、むかしから用筆を重むじ、氣品を貴び、能く自在に、能く健全に、己が感想を發露するのを絶好の場としてゐる、それだから遽に彼の手法を移して、此の手法の上に加ふことは出來ない、もしこの變動を人爲で早めやうとするには、即ち改良をしやうとするには如何なる程度まで西洋畫の手法を採り用ひて可いか、いな日本畫に合理の寫生をなさしむるの法は、如何にして効を收むべきか、この點についてはいまだ明言することが出來ない、私の望みをいへば、この點は世の藝術家に十分慎重に研究して貰ひたいことである、私は又その手段として幾名かの青年畫家を選び、實際に當つて測量して見たいと考へて居ます

△洋畫家久米桂一郎氏曰く、畫は何だつて形から來るのだ、一切

の初めの階級が物の形を捉へるにあるのだ、寫生で十分腕を磨きあげたうへで、それから畫家銘々の腦裏を一轉して、眞の畫といふものがその指頭ゆびかみに現はれてくる、日本畫はこの寫生といふことの素養がない、勿論寫生といふ仕方はあるが、西洋畫の寫生とは土臺から違つてゐる、それだから日本畫を改良しやうとするなら、マア形を捉へることから初めるンだね

△國畫家荒木寛畝氏曰く、ちか頃若い人達がおひ／＼西洋畫にばかり狂奔して、日本畫を誠實に稽古するものが尠なくなるのは、困つたものだ、だがこれも一時の風潮だらう、日本畫にはむかしから獨得固有の妙所がある、決してへたな改良をするには及ばない

△鑑識家小原重哉氏（曾て現實に顯はれたる改良畫について）曰く、所謂改良家の手に成つた畫は、今の儘ではトテも正しいものとはいはれぬ、この程も人と話したことだが、改良畫は病、膏肓に入つたもので、諺に螻蛄醜を知らずとはこの事だといふ説も出たくらゐるだ、あれでは仕方がない

△美術院評議員長岡倉覺三氏の持説は、さきに或る新聞記者の問に答へて曰く、畫は想なり、想を離れて畫なしと、記者はたしかに斯くありしと覺えぬ、氏が率うる一派青年畫家の間に、コ、ロモチといふ流行語あり、その製作品に、古道を離れて西洋畫の姿致を加へたるものあり、これ恐らくは皆この根本主義より脱化したものならむ、畫即想説より實現したるものならむ

△國畫家橋本雅邦氏の持説は、この頃大橋乙羽乙羽子の著はしたる名流談海に載せて曰く、畫の眞趣は氣品のうへにあり、畫家の伎倆は草

畫について見るべしと、畫即想説はやがて畫趣氣品説の氏が筆端によりて世に顯はれぬ、記者は氏の古道に依れるものに於いて、大に嘆賞し、古道に依らざるものに於いて、少しく蹙蹙するものなり、いまだ氏と相知らず、希はくは馨咳に接して親しく説を盡すを得む

△洋畫家淺井忠氏の改良談は、これもいまだ聞くを得ざれど、或は日本畫學生に、まづ洋式の木炭畫を學ばしむべしといへる、至極斬新なる意見なりといへるものあり

△洋畫家黒田清輝氏以下の談片は、號を追ふて記載することあるべし

（明治三十二年四月一日『時事新報』）

○美術通信 △△生「この分大村西崖執筆」

「上略」△わが美術界の現状よりいへば、總ての改良は先づ官校より創めざるべからず、美術學校が日本畫生に課して寫生に力めしむるは、頑迷固陋の老大家と、表面のみを改めて改善の實を擧げたりと思へる輩と、また繪畫の根本義を知らず形式美に心酔する輩とには、必ずや擯斥せらるべし、然れども日本畫にして改良せざれば止む、苟も改良せむとならば先づ寫生より入らざるべからず、若し美術學校が更に一步を進めて美術解剖を實行するに至らば、ます／＼わが望みに叶へりとなす

△人體解剖は國法の制限ありて濫になすべからず、若し久保田氏の幹旋によりて之を美術學校の講堂に見るを得ば、日本畫といはず、洋畫といはず、彫刻といはず、なべての純正美術はそのお蔭

を蒙りて面目を一新するに至るべし、是れまた久保田氏が一臂を揮ふべきところなり〔下略〕

(明治三十二年五月十七日『時事新報』)

●美海櫓影

我美術界も何時まで斯^かふ混沌たる有様では困ると此に美術教育の方針に着目して來たは嬉しい次第だ 黒田清輝が牛込の、山坊〔外山正一の筆名——編者註〕と既に之を議したる由は豫々聞て居たが松岡壽、小山正太郎、淺井忠なども今年三月の明治美術會評議員會で之を議定し花房同會頭の詰問に答へた〔下略〕

(明治三十二年六月二十日『毎日新聞』)

『日本』の罵倒先生(中村不折)と『読売新聞』の長谷川天溪との間で日本画の是非をめぐる紙上討論が行われたのもこの頃(三十二年四月)であった。

この日本画改良問題について、当の本校でどのような検討がなされ、どのような結論に達したのかは明らかでない。その点については報道も左の記事の範囲を出るものは無かつたようである。

○美術通信 △△生〔この分大村西崖執筆〕

〔中略〕

△東京美術學校の日本畫科は、この學期より大に寫生教室を擴張改良し、また大に室外寫生を奨励すといふ、これ寔に國粹家、理想家、心持家の跋扈せる時代に見難き美學なり、庶幾はくはお化

人物または嘘八の山水花鳥など、迹を日本畫に絶つに至らむか、斬新の良法も時ありてか愚論妄評の攻撃なきを保せず、定見に乏しき日本畫家のこれに動かさるゝこと無からむを望む、至囑々々

〔下略〕

(明治三十二年五月七日『時事新報』)

◎美術學校にては日本畫教授に關する意見を其教授中に覺めしか此頃其々差出したりと。

〔日本美術』第十号。明治三十二年八月、文中の「此頃」は六月をさす。〕

●よみうり抄

◎日本畫新教授法 日本畫教授の方法を完全せん爲め東京美術學校長の徵せし教授の意見ハ果して取るべきもの有りしや、其結果とも見るべき寫生の新法ハ寛行以來頗る好成绩にして屋外寫生の如きハ最も有望のものと認めらる〔下略〕

(明治三十二年六月十一日『読売新聞』)

●美海櫓影

〔上略〕◎美術學校では今度繪畫撰科にも研究生を置くことになつて卒業後の研究に便するとは至極尤〔下略〕

(明治三十二年六月三十日『毎日新聞』)